ＳＭツアー：貴女の妄想叶えます

第３話：海女と鮑と褌と

濠門長恭

登場人物
※は『海女無惨花』『ピンク海女』で登場した人物
＃は『ＳＭツアー第１話』で登場した人物

※百海昭彦（５３）
川崎聡美をさらった国会議員との確執の末、建設会社をつぶされた。しかし、百海観光（株）の社長として、ピンク海女のイベントで荒稼ぎしている。

※百海益二（６３）
村長兼漁協組合長。たまに顔を出す程度。

※川崎聡美（２２）
最初の裏ピンク海女三人組のひとり。
国会議員の急死後も被虐が忘れられず、舞い戻った。
昭彦の復讐に喜悦し、客との恋愛も厭わない情熱海女としてもＳＭに励んでいる。
同時にデビューした母は引退して、地元でスナックを経営。

※越村美穂子（２８）
最初の裏ピンク海女三人組のひとり。現在は遣り手婆役でもある。

＃西川麻凛（２２）ＳＯＳコンダクター
ＳＭツアー社の裏社員。屋外露出や色責めを好む。
今回はツアーコンダクターとしての給料だけでなく、裏ピンク海女としてのバイト料ももらえて、ほくほくしている。

＃野々村早苗（１８）ＳＯＳ参加者
女囚性務所の体験者。専門学校の夏休みを利用して、１週間の短期アルバイト。
前回のツアーで林円花や村上詩織のドＭぶりを見せつけられ、今回も聡美に刺激されて、過激な責めを体験してみたくなる。

新藤美海（２１）ＳＯＳ参加者
一生の記憶に残る経験をしたいと思って参加。
道産子（名前に違って、沖縄県民ではない）だからカナヅチ。

南友紀奈（２７）ＳＯＳ参加者
良人にそそのかされて。
（夫も客として訪れるが、友紀奈の目の前で他の娘といちゃつく）
海と小屋を半々。

鈴木宮廷（ミヤコ：２５）地元娘
ピンク海女開業時から表で参加。２年前から情熱海女に転身。

柾田千鶴（１８）地元娘
進学せずにパラサイトだが、夏だけで生活費を稼げる。

田所志穂（２３）他県在住者
ソープ嬢。夏はバカンスと出稼ぎを兼ねて、毎年来ている。

目次

登場人物 ..... - 2 -
１．露出とアルバイ春 ..... - 10 -
２．海中レイプごっこ
３．洋上残酷拷問再現
４．夫の好きな海女褌
５．ツアーは現地解散
後書き

Splendid Marvelouse Tour へようこそ！

弊社では貴女様の被虐願望を叶えてさしあげるために、

Suspenseful Option System

を御用意致しております。

Non Vartual / Non Fantasy / Non Role-playng

最少催行人員は１名様です。

末尾のメールフォームより、できるだけ詳しくご要望をお知らせください。

弊社が貴方様に最適なプランを個別に設計させていただきます。

なお、貴女様の安全は社会的にも肉体的にも守れるよう最大限の努力を致しますが、必ずしもこれを保障するものではありません。（現在まで、事故例はありません）

弊社にて定期的に催している企画もございます。国内限定で安全性も高く、料金も超格安に設定していますので、まずはこちらをお試しになられることを推奨致します。

１：新年寒中水泳　１月４日（日帰り）

催行人員：１名様～３０名様

参 加 費：交通費のみ（諸経費はお客様負担です)。

男性同伴者との参加も可能です（推奨しま

す)。
褌での参加ですが、胸に晒を巻いていただきます。

２：褌海女ショーと夜の鮑売り　夏季随時、日程応相談。
催行人員：１名様～３名様
参 加 費：交通費のみ（諸経費不要）
・地元女性の参加者が素潜りを指導します。
・ベテラン海女から私的性裁を受けることがあります。
・宴席での接待は義務ですが、鮑売りは自由参加です。
（売上代金の７０％を還元致します）

３：夏季柔道合宿　８月１２日～８月１７日
催行人員：３名様～８名様
参 加 費：交通費＋３万円（諸経費含む）
・練習、入浴、宿舎とも男女同室です。
・道着は素肌に着用していただきます。
（帯と下衣を不許可にする場合もあります）
・柔道未経験者にも、手取り足取り指導いたします。
・貞操の保証は致しかねます。

４：寒中座禅修行　１２月１０日～１２月１６日
催行人員：２名様～５名様
参 加 費：交通費のみ（諸経費不要）

・修行は女性のみですが、一般男性が補助します。
・警策は肩だけを叩くとは限りません。
・姿勢の悪い女性は、縄やベルトで物理的に矯正します。
・座禅転がしは拒否できません。ピルの使用は任意です。

その他、各種企画を検討中です。

国外でのイベントも新たに立ち上げました。国内に比べてリスクが高くなります。

Ａ：女囚性務所　不定期
催行人員：１名様～３名様
参 加 費：一般ツアー費用に準じます
・実際に女囚（前科にはなりません）として２週間程度のＶＩＰへの性的奉仕に従事します。
・看守たちの女囚への虐待は日常化しています。
・日常生活および性生活に支障が無い程度の半永久的な肉体への損傷を受ける場合があります。
・当国内外の長期服役囚もいますので、言動には気をつけてください。

Ｂ：ポニーガール
催行人員：１名様～４名様（厩舎の空き具合によって変動します）

参 加 費：一般ツアー費用に準じます。
・年齢や容姿によっては、使役ロバにされることもあります。
・調教やパレードの様子は映像作品として販売されます。
・流出事故は起きていませんが、保証は致しかねます。
・種付けは拒否できません。ピルの使用は任意です。

その他、裸族性人儀式、男女格闘技戦などを検討・現地調査中です。

ＳＭツアー有限会社

１．露出とアルバイ春

　西川麻凛に率いられた三人のツアー客は、高速艇のキャビンから、緊張した面持ちで海を眺めていた。
「港は見えなくなったし、目的地の島は見えないし。船酔いで気分が悪い」
「甲板に出られないなんて、監禁されてるみたいだわ」
「濡れちゃう？」
　麻凛が最年少者の野々村早苗をからかった。
「まさか。縛られてもいないのに」
　へえ、といった顔になる二人のツアー客。
　彼女たちも、マゾ性癖はじゅうぶんに持ち合わせているし、露出願望もある。だから、昔さながらに海女褌一本で素潜りをして自前の鮑を客に踊り食いしてもらうといった危ないアルバイトに応募したのだ。
　しかし、早苗のドＭぶりにはかなわない。彼女は某国で麻薬の運び人として摘発されて司法取引で特別囚としてＶＩＰに性奉仕をするというツアーに三月に参加したばかりなのだから。もっとも、同じ参加者である林円花のように、わざと看守に反抗して苛酷な懲罰を受けたりはしなかったのだが。
　早苗にしてみれば、裸で緊縛されて、日除けもないような小型漁船の船底に転がされて

運ばれたかったところだ。
「あ、見えた。あの島じゃない？」
　船酔いに苦しんでいた新藤美海が、窓の外を指差した。立ち上がって、キャビンのドアまで行ったところで、麻凛に止められた。
「どうしても甲板へ出るんだったら、ライフジャケットを着けてね」
　三十ノットで突っ走る高速艇には、それだけの風が吹きつけているし、揺れも大きい。地元の警察には話をつけてあるが、転落事故で海上保安庁あたりが乗り出してくると、ややこしい問題になる。
　もちろん、四人に禁足が言い渡されているのは、それだけが理由ではない。昔の海女小屋を再現しただけのささやかな観光施設に、地元の海女でもない若い女を定期的に送り迎えしていると、実際に痛い腹をさぐられることになりかねない。
　だから海女小屋も船着き場も、洋上からは見えない岩陰に設けられてあった。そこに四人を下ろすと、高速艇はすぐに船着き場から出て行った。
　荷物のほとんどを港に預けてきて、手ぶらで降り立った四人を出迎えたのは、引き締まった筋肉を赤銅色に焼けた肌で包んだ、こういった場所でなければ名のあるアスリートとして見られるだろう三十路手前の女性と、こういった仕事に公然と就けるぎりぎりの年齢

にしか見えない少女。
　引き締まった熟女は、越村美穂子。初代の情熱海女三人組の中でただひとり、レイプも拷問もされずに自発的に志願した女性だった。
　少女のほうは柾田千鶴。今年デビューしたばかりだが、年齢制限の緩い観光海女は経験していない。
　ちなみに。五年前の開業当初は、エロチックな海女ショーを演じるだけの表ピンクと、客との一夜の恋愛を前提とした裏ピンクとに分けていたが紛らわしいので、今ではそれぞれをピンク海女、情熱海女と称している――のは、百海観光の関係者だけで、古株の美穂子などは、相変わらず『裏ピンク』と言っているが。
　観光海女は、スパッツなどを着用したうえで、各地の観光海女にも見られるような、全身を包む白衣を着用している。身体に貼り付いて濡れ透けるとはいえ、建前としてはエロの要素がない。
　ピンク海女は、比較的おとなしめの海女褌と、胸はニプレスだけ。こちらはアダルト専用だが、カップル客もたまには来る。
　情熱海女は、つまり情熱的に自由恋愛をするという意味だが、コスチュームも百海観光株式会社最高顧問の百海益二に言わせれば「古式豊かに」極限まで露出過剰な海女褌一本で潜る。さらに、股錘などという史実無視

のエロチックな小道具を使っている。これの使い方を、ショーの海域まで往復する合間に船上で披露するのも、売りのひとつになっている。こちらは成人男性専用と（制限はしていないが、実質的にはそう）なっている。
　千鶴がいきなり情熱海女になったのは、やはり観光客との自由恋愛が大きい。なんのテクニックも接客術も必要とせず、高級ソープ嬢よりも稼げるのだから、夏のアルバイ春だけで、あとは遊んで暮らせる。もっとも、千鶴は地元っ娘だけあって、素潜りは得意だった。だから海女小屋専門ではなく、実際の海女漁も一日おきに実演している。
「海女小屋へようこそ――と、言っておくわね」
　美穂子は、すぐ着替えるようにと四人に命じた。
　四人にも異存はない。先輩が細長い三角形の布一枚しか身に着けてないのに、Ｔシャツやショートパンツではかえって落ち着かない。
　男の目がないのだから、堂々と全裸になって――
「あ、ちゃんと海水で洗ってからにしてね。海神様の怒りに触れる――というのは、お客様向けに雰囲気を出す演出だけど。なにかあったら、必ず海水で洗う習慣を身に着けておくと、病気の予防につながるから」
　海水に消毒作用があるのではない。内部が

傷ついていれば浸みる。感染のリスクが高まるから、即座に病院へ行って事後の予防処置をしてもらいなさいという意味だと、美穂子が説明した。
　三角形の布を細い紐で腰に結びつけただけの（大昔の）海女姿になって、四人は全裸のときよりも羞ずかしそうにしている。
　ことに友紀奈は淫毛を隠しきれずに、頬を染めている。が、誰も前を隠そうとしないのだから、ひとりだけ隠すのもためらわれる。
　麻凛と早苗には、淫毛が見える心配はまったくない。麻凛は永久脱毛をしているし、早苗も女囚性務所にいる間に剃毛の習慣がついていた。
「四人の中で泳げる人は西川麻凛さんと南友紀奈さんだけらしいけど、素潜りはできる？」
　ＳＭツアー社がピンク海女事業と提携したのは昨年のことだ。五月から募集を開始して二人だけが参加したのだが、このときは麻凛の先輩である村上詩織がコンダクターを務めた。だから、美穂子も麻凛のことは簡単な履歴書以上のことは知らないのだった。
　友紀奈が、小学生みたいに手を上げて答えた。
「スキンダイビングの経験があるから、だいじょうぶと思います。でも、ゴーグルを使えないのが不安です」
「慣れたら、海底の魚介類くらい簡単に見分

けられるようになるわよ」
「わたし、カナヅチじゃないってレベルですけど……」
　三人のツアー参加者が答えたアンケートの答えを、麻凛はしっかり覚えている。早苗以外の二人も、それなりのマゾ性癖を秘めている。ＳＭツアー社の社員としては、それを開花させてあげるのも仕事だと思っていた。それには、まず自分が積極的に振る舞うことだ。
「厳しく仕込んでください。ヘマをしたら、お客様の前でも容赦なく、ビンタとかもっとひどい罰を与えてください」
　ふっと、美穂子が苦笑した。
「聡美ちゃんと張り合えそうね」
　川崎聡美。まだマゾ性に気づかぬどころか男性経験もない女子校生が、ＳＭプレイとしては過激な拷問に掛けられて、裏ピンク海女に仕立てられた。しかし、最初の宴席で母親とのレズショーまで強いられて、マゾに開眼した――ということまで、麻凛は高山社長に耳打ちされていた。
　美穂子は、さらになにかを考えている様子だったが、もう一度苦笑した。
「明日はちょっとしたハプニングがあるんだけど、麻凛さんには難しいし。明後日は聡美ちゃんの出番だけど……本人が張り切ってるしねえ」
　ツアーの日程は六泊七日。前半に出番がな

いとすれば、後半に期待するしかない。
「あ、これはルールじゃないけど。社会復帰してからのリスクを考えて、名字はできるだけ使わないでね。源氏名はかまわないけど、面倒だから、私はミホで通してる。彼女はチズちゃん」
　麻凛たちも、本名かそれを崩した形でいくことにした。つまり――マリン、ミミ、サナエ、ユキ。
「それじゃ、着いた早々で申しわけないけど、特訓を始めるわね」
　最初にしたのは、全身に日焼け止めクリームを塗り込むことだったが。水を弾いては昔の海女らしく見えないからと、海女ショーの本番では使用禁止にされているから、一週間が過ぎる頃には、四人も地元の二人に負けず劣らずの赤銅色になっていることだろう。
　つぎに細長い銀色の――ディルドにしか見えない錘が手渡された。
「後ろに小さなリングが結ばれているでしょ。褌の縦紐をそこに通すの」
　そこで、美穂子がちょっとだけ口ごもった。
「これは伝統――といっても、五年前からだけど。処女は後ろ、経験者は前に挿れることになってるの。といっても、これまでに後ろへ挿れたのは三人だけだし、それも初日だけのことだったわね」
　美穂子が海女褌をほどいて、股錘を紐につ

なぐと、蹲踞の姿勢になって、するりと呑み込んでみせた。
　千鶴も同じようにして。さすがに四人はおっかなびっくりといった様子で、とにかく股錘を体内に収めた。リングが三角形の先端を絞って、ますます海女褌が女性器の輪郭を浮かび上がらせた。
　桟橋のまわりはいきなり水深が深くなっているので、二百メートルほど離れた小さな砂浜まで移動する。ビーチサンダルなんか江戸時代にはなかったから、藁で編んだサンダルのような履物を突っ掛けて、百海観光と背中に染め抜いた薄い法被の裾を胸元で縛るが、あえて乳房は露出させておく。
「誰も見ていないんだから、こんなところまでこだわらなくてもいいのに」
　美海のぼやきに、千鶴が反応した。
「付け焼刃だとボロを出すよね。プロ意識ってやつです。なんたって、手取が一本七万円なんですから」
　客が払ってくれるのは十枚だが、三枚は小屋の使用料とかさまざまな名目で百海観光に徴収される。しかし、バック率七割なんてソープはないのだと、自分の手柄のように吹聴したが。さすがに決まりが悪いのか。
「高級ソープよりリツがいいってのは、シホ姉さんからの受け売りだけど」
　ちろっと、舌を出しておどけた。

田所志穂は、現役のソープ嬢。本職よりずっと稼げるし好きなだけ泳げるというので、三年前から八月いっぱいの出稼ぎに来ている。
砂浜に着くと、まったく泳げない早苗と美海も含めて、全員が海にはいった。準備体操などはしない。本職の海女は昔も今も、そんなものはしないのだと、これは美穂子が自信たっぷりに説明した。
「カナヅチの二人に言っておくけど、水に浮かぼうとか潜ろうとか、まったく考えなくていいのよ」
ウェイトを着けているから、手足を伸ばしていれば、わずかに水に浮かぶ。まったく泳げないのなら、むしろウェイトを重めにして沈むに任せて、浮かびあがるときは命綱に頼る。
「行動の自由を妨げられるから、命綱は使わないわね。今年の裏海女で使ってるのは聡美ちゃんだけかな」
深々とため息を吐いてから付け足す。
「極太の股錘を前後に突っ込まれて、全身を縛られて――のことだけどね」
麻凛が息を呑んだ。あとの三人は、それが苛酷な水責めだとすぐには理解できなかったらしい。
「あの……そいうのも、ショーなんですか？」
「半分はね。社長ったら、親会社を潰されたのは聡美ちゃんのせいだって思い込んでるか

ら」
　裏ピンクも含めた観光海女の企画を立ち上げたとき、百海昭彦は有力な国会議員の後ろ盾を得ようと目論んだが、虚仮にされたばかりか目玉商品というべき（なにしろ、現役女子校生であり稀有の悦虐体質でもある）聡美を奪われている。それだけが理由ではないが、昭彦と国会議員とのあいだで確執が生じて、親会社である百海建設は議員の圧力で潰されてしまった。
　その議員は二年前に急逝して、聡美は昭彦の元に舞い戻っている。両親の介護が必要とか、若い叔母の美穂子に憎まれ役を押しつけるわけにもいかないとか、聡美はもっともらしい理屈を並べてはいるが――つまりは被虐を求めてのことだった。
　昭彦も、そのあたりの機微は承知で、愛憎こもごもに（いずれにしても凄まじい責めになるのだが）聡美を遇している。
　ここらの事情は、もちろんツアー参加者には知らされていない。ぽかんとするばかり。
「まあ、それだけ社長は聡美ちゃんに執着してるってことでもあるけど――さあ、無駄話はおしまい。午後四時まで、あと一時間半。特訓を始めるわよ」
　股錘で浮力を相殺するから、単純に潜ったり浮かんだりするのは、麻凛と友紀奈はすぐにコツを覚えた。あとは、潜水時間を延ばす

だけだが、これは潜水に適応した身体に変わらなければどうにもならないのだから、特訓で成果が出るというものではない。
　泳ぎながらの息継ぎができない早苗も、ただ潜るだけなら、一時間半のうちにできるようになった。
　自力で潜水できないし、ウェイトに引っ張られて沈むのも恐い――そもそも、顔を水に浸けるだけでパニックになるという美海は、海女小屋の掃除当番を割り当てられた。
「だって、道産子なんだもの。泳げる子のほうが少ない」
　この衝撃的発言には、麻凛を除く全員がのけぞった。
「だって、美ら海じゃないの？」
「だから、ミミだってば！」
　水が恐いくせに、なぜ海女の真似事をする気になったんだ――とは、誰も尋ねない。通報される危険も無しに公然と野外露出できて、しかも（自前の鮑を売る他にも）幾許かの日当をもらえるのだから、露出願望のある女には楽園そのものだ。

　午後四時前に、二隻の小型漁船が桟橋に着いた。それぞれに船頭役の男と海女が二人ずつ乗っていた。
　その直後に大きな遊覧船が桟橋に着いて、十二人の観光客を上陸させた。いうまでもな

く、成人男性ばかりだ。
　船頭は島に残して、今日でアルバイトが終わる二人の海女だけを乗せて、遊覧船はいったん港へ引き揚げる。
「皆さま、隠し島へようこそ。この島のすぐ近くにある岩礁は、江戸時代から今日にいたるまで、貝類の宝庫として余所者には秘密にされてきました。それゆえ、海女の拠点となったこの島も、隠し島とされています」
　美穂子が形通りの案内を始めたが、まともに聞いている観光客などひとりもいない。法被も脱ぎ去って海女褌ひとつになった若い女たちを、性欲にぎらついた目で品定めしている。
　遊覧船が迎えに来るのは午後六時。宴会は七時半から始まって、一時間もしないうちに『お持ち帰りタイム』となる。それまでスタミナを温存しておこうとする客は少ない。六時までの二時間でひと遊びできる。いや、こちらが本筋だと心得ている。ホテルのベッドでは、海女姿も貧弱なコスプレ以上には見えない。海女小屋あるいは浜辺での野趣あふれるプレイこそが、ご当地ならではの遊びというものだ。
「きみは日に焼けていないね。新人さんかな」
　海女小屋のまわりにそれらしくたむろしていた海女たちに、観光客が群がって、たちまちにカップルが出来上がっていく。観光客は

十二人、海女は八人。四人はあぶれる計算だが、そうはならない。千鶴は二人の男に挟まれて、特訓の砂浜へ向かう。美穂子も二人の男に腕を絡めているが、全員が落ち着くまで恋愛は始めない構えでいる。出稼ぎソープ嬢の志穂が三人の男と海女小屋へしけこんで、残ったのは男が五人と、四人の新人とベテランの鈴木宮廷（みやこ）。彼女は五年前の開業当初から観光海女として働いてきて、二年前にピンク海女に転じた。本職の海女として通用する腕を持ち、枕営業のテクニックも志穂に舌を巻かせるほどの、いわば万能選手だった。

五組のカップルも、すんなりと決まった。海女小屋で一対三のアクロバットを見ながら自分も励もうという数寄者もいれば、水中ファックを所望する客もいる。その客が最初に選んだのは皮肉にも海アレルギーの美海だったので、麻凛とチェンジした。

千鶴たちを追う形で砂浜へ向かいながら、ぽつりぽつりと会話をする。

「きみも新人さんだね」

「今日が初日なんですよ」

「ええ？　じゃあ、こういう仕事も初めてかな？」

「私、今は勤務時間外です。だから仕事じゃなくて、あなたを好きになったから、こうしてお話してるんです」

売春ではなく自由恋愛だという、見え見えもろバレの建前でも、きちんと言っておかないと自社と百海観光の双方に迷惑をかけることにもなりかねない。
「話をするだけかい？」
短大を卒業して二年目の麻凛よりせいぜい三つか四つしか違わないくせに、どこかねちっこい話し方をする男だった。こういうのもプレイのうちと思っているのだろう。
「そうですね……続きは、海の中でしませんか。若いんだから、連チャンするんでしょ？」
千鶴が立ったまま男二人にサンドイッチされているのを十メートルほど先に見ながら、麻凛は男の服を脱がしにかかったが、本職の嬢ではないのでもたついた。男のほうがじれて、自分でズボンを脱ぎ捨てると、フルチンになって麻凛を海へ引っ張り込んだ。
ＳＯＳ（Suspenseful Option System）のコンダクターは、みずからも被虐に身を曝すのだが、麻凛はハードな苦痛系が苦手だった。そのかわり、露出や輪姦を含む快感責めは積極的に受け容れる。
海にはいると、今度は逆に麻凛が男を遠くまで誘い出した。胸のあたりまで水に浸かったところで、身を沈めて水中フェラに挑んだ。
初めての試みだったが、男の腰にしがみついていれば、股錘を抜いていても身体が浮き上がることもなく、あまり困難はなかった。

塩味が利いていてい美味しい――というのが、麻凛の感想だった。
うがいをするように海水を口の中で動かすと、ペニスがぴくついて、ますます怒張する。
一分もしないうちに息が続かなくなって、浮上した。
男がさらに深いところまで移動して立ち泳ぎを始めた。麻凛は泳げるし潜れるようにもなったが、立ち泳ぎはできない。正面から男にしがみついた。
男は左手で麻凛を抱きながら、右手で海女褌を横にずらした。
「中は焼けるように熱くなってるね」
指で掻き回してから。身を沈めて、下から麻凛を突き上げた。
「あはっ……」
麻凛が短く喘いだのは、演技ではない。青姦の経験なら短大生の頃から何度もあるが、水中というのは初めてだった。
男は泳ぎ方を巻き足からカエル足に変えた。腿の開閉につれて大きく浮き沈みするので、そのまま緩やかなピストン運動になっている。
男は右手で麻凛の尻をつかむように揉み立て、左手をふたりの間に差し入れて乳房を、これも乱暴に揉みしだいた。
「あああ……痛い。もっと激しく虐めて……」
苦痛は苦手といっても、それは本気の一本鞭とか針とか腹パンチなどで――乱暴な愛撫

は、乳首やクリトリスをつねられるくらいまでなら、みずからおねだりさえする。
　男は麻凛に応えて、愛撫の手にいっそうの力をこめたが、麻凛の被虐願望を満たすほどではなかった。しかし、嗜虐癖が備わっていないわけでもないようだった。
　腰までの浅瀬に戻ると。
「フィニッシュ掛けるから、息を止めててな」
　麻凛を水中に押し倒して、正常位で荒腰を使い始めた。しかし、水の抵抗で思うように腰を振れずに長引いてしまう。
　息が苦しくなった麻凛がぼこぼこっと泡を吹くと、髪をつかんで海中から引き上げ、息を継がせてからまた沈める。
　それを三度繰り返して、男は射精した。
「死ぬかと思った……」
　荒い息を繰り返しながら、麻凛がまんざらでもなさそうにつぶやく。男が引き上げてくれるタイミングが早すぎたとさえ、思っているのだが。
　浜辺に目を向けると――千鶴が男二人に挟まれて体育座りをして、麻凛たちを見ていた。
　五人が連れ立って海女小屋へ引き返す。浮気な男たちは、パートナーを交換して、べたべたと身体を触りまくってくる。麻凛は四本の手で、乳房も尻も海女褌の中も、さんざんに弄ばれた。
　男の残滓は、麻凛も千鶴も海水で洗い落と

している。浸みたりはしなかった。
　鮑売りは、原則として生身だった。女のほうはピルで生理周期を調整しているし、男は事前に血液検査の証明書を提出している。
　もちろん偽造を見破る手段はないし、検査後に感染している危険性は排除できない。百海観光では、過去に『軽い』性病にかかった女性が二人いるだけで、ＨＩＶ感染は絶対に無いと説明しているし、それが事実なのはＳＭツアー社独自の調査でも確認している。とはいえ、これからも安全が続く保証はない。
　しかし、世の中に絶対の安全はない。外を歩いていても交通事故に遭う危険はあるし、それどころかコンビニに自動車が突っ込んでくることさえある。プロが提供する食事で食中毒を起こすこともある。他人よりも大きく欲望を満たすためには、他人より大きくリスクを取るしかない。すくなくとも麻凛は、そんなふうに割り切っている。

　六時ちょうどに遊覧船が迎えに来て、海女を含めて全員が港へ帰るはずだったが。
「俺ら、ここにシホちゃんと残るわ」
　志穂が相手をした三人連れの客が申し出た。よほど、ソープ仕込みのテクニックに惚れ込んだらしい。オールナイトは五割増しで、それが三人分だから、体力さえもてば、志穂にはおいしい話だ。宴会をキャンセルしても返

金は無しだから、百海観光にも損はない。
　遊覧船からは、島での四人の酒と簡単な食事とＥＤ薬が格安料金で提供された。
　島に残っていた船頭と七人の海女と九人の客とを乗せて、遊覧船は港に向かった。
　昨年から就航している新造の遊覧船は、引き上げ式の水中展望室は持たず、喫水線から下に船底を含めて、大きなガラス窓が幾つも配されている。椅子に座っていても海中の様子はよく見えるのだが、新参の四人は立って窓にへばり着いて、夢中で眺めている。
　それは麻凛のアドバイスだった。一本の細い紐を食い込ませただけの尻を客のほうに向けて突き出しているのだから、客としては海中を展望するどころではない。
「ストリップ劇場でしたら、踊り子の身体に触れないでくださいとお願いしますけれど、ここはストリップ劇場ではありませんし、海女は踊り子ではありませんから」
　美穂子も心得ていて、遠回しに客をあおる。洋上の三十分間は挿入こそないものの集団乱交パーティーさながらの様相を呈した。
　船が港に着くと、海女たちは乱れていた褌を締め直し、シースルーの法被を羽織って。ベテランの三人は堂々と、麻凛もそれなりに、しかしＳＯＳ客の三人は羞ずかしそうに（それでも前を隠したりはせずに）、ドウミ・リゾートホテルまでの道を闊歩した。

オーナーの百海明彦は県警のトップともナアナアだから、その方面の心配はない。
ネット経由の流出や炎上にも手は打ってある。観光客には罰金付きで撮影禁止を承諾させてある。地元住民は――百海観光と漁協がタッグを組んでいるのだから、親族まで引きつれて街を出て行く覚悟無しには、なにもできない。
それでも外部の人間による隠し撮りまでは完全に防げないが、たいていは誰かが気づくから、車からの撮影なら安全運転義務違反、歩行者なら漁協の人間による肖像権侵害への注意などで、データを削除させる。
事実。ピンク海女が開業して五シーズン目になるが、ネットで見つけられるのは表ピンク海女の――ややゆったりした褌とニプレスで乳首を隠した、おとなしい画像までだ。それも、ヒットするのは十件とない。百海観光と所轄とが連携したサイバーパトロールの結果だ。
ホテルに着くと、観光客は部屋で浴衣に着替えて、すぐ宴会場に集まる。そのわずかな時間を使って海女たちはシャワーを浴びて髪を乾かし、はじめて薄化粧をする。
隠し島で一発抜いたとはいえ、船内でも若い女の裸身をまのあたりにするどころか実際にも触れて揉みしだいて、参加客の性欲はすでに暴走寸前になっている。

今日は個別参加者の寄せ集めだから、上司の訓示とかもなく、のっけからのドンチャン騒ぎとなった。
隠し島へのオプションツアーに参加しなかった客も含めて十九人に対して海女は八人の予定だったから、そのままでは一対一の接客ができない。表ピンクからの志望者が二名。あとは、派遣の（自由恋愛を拒まない）スーパーピンクコンパニオンで頭数をそろえてあった。客が三人と海女が一人減ったから買い手市場となったこともあって、ドンチャン騒ぎがいっそう派手になる。
海女はとっくに薄物の法被を脱ぎ捨てて、おとなしい娘でも海女褌ひとつで、それぞれの客の横に侍っている。新人とコンパニオンへの割付けを優先してあぶれた美穂子と千鶴にいたっては、それもかなぐり捨てている。スーパーピンクコンパニオンの、素肌にシースルーの超ミニ浴衣が、まったくの着エロにしか見えない。
全裸の美穂子と千鶴が、客に乞われて仰臥した。客が、ぴったりと閉じ合わされた股間に升酒を注ぐ。
「おまえも付き合えよ」
連れの男に声をかけて、みずからは若い娘の股間に顔をうずめて酒をすすった。
「おおお。ワカメ酒か。俺も――そうだな、マリンちゃんにお願いしようか」

ついていた客に乞われて、麻凛が立ち上がる。
「やだあ。すごく羞ずかしいなあ」
言葉とは裏腹に、ためらうことなく海女褌を剥ぎ取って、無毛の股間を周囲に見せつけた。
「へええ、パイパンかあ。これじゃ、ワカメ酒にならないね」
「私たちは、貝殻酒と言ってますのよ」
股間を舐められながら、美穂子が解説した。
「カワラケ酒というのは効いたことがあるが、なるほど貝殻ねえ。いかにも海女さんって雰囲気が出てるな」
麻凛も客の前に仰臥して、太腿を意識して締め合わせた。男の前で脚を閉じるなんて、何年ぶりだろう――などと、淫らなことを考えながら。
「海女さんといえば、鮑だったよな」
ボディビルで鍛えたようなマッチョマンが、敵娼の美海を全裸に剥くと、逆さに抱き上げた。
「ほら、脚を開いて」
隣の客についていたコンパニオンに、これも升酒を美海の股間に注がせた。割れ目から酒があふれる。
「これが鮑酒だ」
口をすぼめて、股間の酒をすすった。
「きゃああ……くすぐったい！」

美海が嬌声をあげた。
他の客からは拍手が送られる。
ワカメ酒や貝殻酒を真似る者も、さらに何人か。さすがに、豪快な鮑酒に挑戦する者はいない。
「はああ……こんなに激しいお席も、久しぶりです」
地味に（？）乳房をまさぐられていたコンパニオンが、呆れたようにつぶやく。
「久しぶりってことは、前にもこんな宴会を経験してるの？」
「ワカメ酒じゃなくて、ツイスターとか野球拳とか」
「野球拳たって、その恰好じゃ一枚しか脱げないだろ？」
「帯もカウントしますよ。脱ぐものがなくなってさらに負けたら、クパアとかクリ剥きとか。バイブとかアナルビーズを仕込む子もいたし」
「たははは……」
女を膝に乗せて抱き合っている者もいた。挿入まではしていないようだが、覗き込みでもしなければ断定はできない。
麻凛は、おとなしく客にしなだれかかって、料理の食べさせっこをしている。コンパニオンはともかく、海女はほとんど酒に口をつけていない。
明日は、朝からの情熱海女ショーと、それ

に続く海女小屋見学（と、鮑売り）。そのあいだに、全年齢向けの海女ショーがあって、午後一番に表のピンク海女ショー。これには宮廷と志穂も参加することになっている。二時半から四時までは、隠し島の沖合で二回目の情熱海女ショーを演じてから、午前の客を連れ帰る。海女も遊覧船も大車輪。しかも、今夜はまだ鮑を売らねばならない。寝過ごそうと二日酔いしようと勝手な客と同じようには、とても振る舞えないのだった。

だから、宴会が始まって一時間後からの『お持ち帰りタイム』になると、海女のほうから客に催促したりする。海女小屋と違って、プレイタイムは九十分（延長は可能）だから、早く始めれば、それだけ睡眠時間が稼げる。

午後八時半ともなると、宴席に残っているのは、微妙な表情で隅に控えている仲居がひとりと、コンパニオン相手の客が五人だけとなった。

麻凛もとうぜん『お持ち帰り』されて、昼の鮑売りと合わせて十万円の臨時収入を得た。月に二十日も情熱海女を務めれば、ひと夏でサラリーマンの平均年収に迫る稼ぎとなる。

『給料を上げてくれないと、こっちに居ついちゃうかもしれませんよ』

オールナイトを買ったくせに、出すものを出してさっさと寝込んだ客に添い寝しながら業務日報を書いて、くだけた文章で締めくく

って高山社長宛に送信してから、麻凛も眠りに就いた。
　もちろん、どれだけ収入がよくても、ＳＭツアー社の裏社員を辞めるつもりなど、麻凛には無い。最終面接や何度かの研修で、（もうひとりの裏社員である村上詩織と同じように）高山社長に責められ抱かれていることも、理由のひとつにはなっていたが。
　ピンク海女としての公然露出も、続けるうちに新鮮さが失われる。力づくで犯されることもない。ツアーコンダクターとして、さまざまな被虐体験の場に身を曝す生き方を、すくなくとも当面は続けていくつもりだった。